

産業革命期に於ける英國鐵工業についての一つの覚え書

外池 正治

我國に於ける英國産業革命期に關する最近の研究は、これまでの英國經濟史學界の諸業績を簡潔にまとめあげたアシントンAshtonの勞作の中川助教授による翻譯、同様の意圖をもつて邦語によつて書かれた小松教授の優れた概説書、五島、矢口、大塚教授による産業革命期をめぐる見解についての諸論文、及び幾つかの個別の研究等によつて新しい展開がなされている。工業部面についての個別の研究については、中川助教授による木綿工業の種々の角度からの著實な研究があると同時に、同氏による重工業部面としてのボウルトン、ワットに關する紹介的研究、荒井政治氏による産業革命期に於けるカルテルの一形態としての Cornish Metal Company を中心とする銅鑛山業の經營形態の分析等があり、五島教授の所謂「纖維産業革命類型Ⅱ 一般産業革命定型の基本方式」の研究の深化と共に、「非定型

産業部門」の研究も試みられるようになった。しかしそのような「非典型的産業革命」としてとらえられる産業部門の中で、他の多くの工業に對して直接且革命的な影響を與え、近代生産力の展開の脊骨となつたものは鐵産業といつてよからう。といふのは、近代生産力の展開はまず何よりも不變資本に充當されて實體的資本となることを目的として生産される生産物をつくる産業の存在を前提とするのであり、このような生産財生産部門の存在こそ、英國の産業革命をあのようにめざましく發展させたと考えられるからである。英國産業革命の基軸ともいふべきかの躍進的な綿工業の展開も、それを支えた生産財生産部門の存在と發展とを前提として、始めてよく理解され得よう。それにも拘らず、我國に於ける英國産業革命史の研究は、その生成史としては大塚史學による羊毛工業、その確立史としては綿工業を中心としてなされているようであり、このような生産財部門についての産業革命期の分析は一部の概説書に簡単に觸れられているに過ぎず、先の二、三の個別的研究以外、殆んど未開拓の研究分野である。そこで産業革命期に於いて生産財生産部門がどのように生成し發展したか、そして消費財生産部門と如何に結びつき、全體の社會的經濟的構造の展開にどのような位置を占めるのかということ进行分析してみたいという考えから、まず生産財生産部門の中でも最も基礎的部門ともいふべき鐵工業をとらえてみた。勿論、このように極めて限られた紙面であるから、こゝでは英國鐵工業に於ける産業資本形成の主體

的人體的側面である産業資本家層生成の一面をとらえ、その観察を通して、英國に於ける産業革命期鐵工業についての分析方法に關して、幾つかの問題を提起してみた。

二

英國鐵工業に於ける産業資本家層の形成を問題とする場合、まず想起されるのはその系譜に關してであるけれど、アシュトン、マントウ、ハモンド等によって少しの見解の差異はあれ、彼等の家系は多く小生産者層に由來することが一般的に肯定されつゝる。(T. S. Ashton, *Iron and Steel in the Industrial Revolution*, 1924, p. 209 ff., P. Mantoux, *The Industrial Revolution in the 18th Century*, 1928, p. 381, J. L. and B. Hammond, *The Rise of Modern Industry*, 1947, p. 146) これと同時に注目される事は、産業とベネリタニズムの結びつきが、産業革命期の鐵工業に於いて最も豊富にその例が見出され、そのうちでも最も成功し進歩的であった鐵工業者のグループはクエイカー教徒よりなつていたという事實である。まさに「鐵工業の初期の重要な章は、the Society of Friends の範圍をこえる事なくして書かれることが可能である。」(Ashton, op. cit., p. 213) ちがわく、われわれは最近、クエイカー教徒と各産業及び科學の發展との關係を詳細に分析せる實證的研究の成果 A. Raistrick, "Quakers in Science and Industry, being an account of the Quaker contribu-

tions to science and industry during the 17th and 18th Centuries," London, 1950 を持つ事が出來たので、この中で彼が最も力を入れ、そして彼が専門とする鐵工業の發展とクエイカー教徒の影響の問題點を紹介し、その批判を通じて、産業革命期に於ける英國鐵工業についての分析方法に關する問題を若干提起したいと思ふ。

彼は鐵工業を small domestic craft から、この國の基礎産業の一つに變化させたのは、まさにクエイカー教徒の大きなグループだとする。そしてこの産業の構造の中で著しい要素をなしたこのクエイカー教徒の、技術的革新への重要な貢獻と、それまで分散し孤立して別個の工業として獨立生産者によって營まれていた furnaces, forges, sifting mills を family inter-marriages によつて、近代的な large associations と partnerships へと進展させた經營組織的側面への重要な貢獻とを、四つの鐵工業の主要地域のグループを通じて分析している。

最初は北部ランカシャーのクエイカー教徒 Rawlinson 家のグループである。こゝは初期のクエイカーの中心地であるばかりでなく、古くから分散せる鐵作業場をもつ地であった。しかし次第にそのうちでローリンソン家は種々の経過をたどつて他の鐵作業に手をのばし、この地の鐵工場はその支配する廣い網の目の中に包まれるようになる。また出來上つた製品を附近の地には自らが、遠隔の地には同じクエイカーの代理商か、やはりクエイカー教徒に主として販賣していたのである。このよう

なクエイカー教徒の間の密接な関係は、彼等の催す Yeady Meings や他の色々な會合を通じてもたらされたのであった。即ち、彼等によつてしばしばもおかれた會合という經系と、それを通じて編まれる trade という緯糸とによつて、内部に複雑な網の目がつくられ、どんな小さい企業でも孤立して存在しないようになり、彼等の中の友愛關係によつて強く固く結ばれて發展していった。

次はウエイルスとバーミンガムのクエイカー、ロイド家のグループである。このロイド家の物語ほどクエイカー内部の inter-marriages と partnerships に原因する鐵工業者達の間の關係の複雑性を示すものはない。そのほんの一例をあげれば、チャールス・ロイド二世の長男チャールス三世は、活動的なクエイカーで鐵の取引及び鐵工業に廣い勢力をもつ Ambrose Crowley の娘 Sarah と結婚、次男の Sampson も Sarah の妹 Mary と結婚、長女の Elizabeth はやはりクエイカーで鐵の取引と製造をする Thomas Pemberton の息子 John と結婚、又 John の伯父、娘、息子も全部クエイカー教徒の鐵工業者と結婚するというような状態である。このような内部結婚という複雑なパートナーシップの結びつきを通じて、企業の組織は分散的經營から furnace-finey-chafery の完全なる結合が行われる。技術的側面でも同じクエイカーであるダービー家との關係によつて、ヨークスによる鑄鐵と鐵の當時秘密となつていた精鍊方法を早くも一七二二年に採用してゐる。マホイ

ルスに於けるロイド家の鐵工業は最後には失敗に終るが、先の Sampson はバーミンガムへ進出し、その地方の廣い市場を獲得し、結婚とパートナーシップを通じて鐵産業に廣い關係を結び、ついには後のロイド銀行の基礎をもつたのであった。

第三のクエイカーのグループは有名なるコールブルックデイルのダービー家である。三人のエイグラハムは敬虔なクエイカー教徒として産業の遂行に精進し、彼等の妻も熱心なクエイカーであり、又ダービー家と婚姻關係を結び、ダービー家の片腕となつた Richard Reynolds もクエイカーの出であり、クエイカーの仕事に熱心だつた。マントウーはダービー家を鐵工業王の王統であるとするが、まことにコールブルックデイルの主權は數代の間父から子へと手渡されたのみならず、王の一統の如くダービー家は鐵業界での他の權力者と結婚によつて結びついており、そして子孫の直系の者と同様、傍系のものも、鐵工業に結びついてゐる。また技術的側面でも、鑄物の製造、ヨークスによる鐵の精鍊、蒸氣機關のためのシリンドラー、鐵のローレル、鐵橋の作製等、このクエイカー教徒のグループの貢獻は鐵産業に於けるのみならず、全産業にも革命的進歩をもたらすことになつたのである。

第四はヨークシャーの南と西に擴がる大きなグループである。(このグループの資本的側面に關する分析は A. Rastrieh and E. Allen, The South Yorkshire Ironmasters, Econ. Hist. Rev. IX, 1939, pp. 168—185 参照) もともとばやばや

れが獨立的小單位として鑛山、鑄鑪、鍛工場、裁縫工場を有しているが、そのような幾つもの小單位のグループが、スペインサー家の活動によるパートナーシップの變化を通じて、より大きなグループとして一つに結合しているのがこのグループである。こゝでは技術的進歩はみられないが、その経営組織に於いては著しい發展が示され、全部の小單位のグループが、スペインサー家による明確なプリンシプルのもとに、地方的集中と全體の企業の統合を行うに至り、共通の勘定形式が導入されて利潤計算が行われるという近代的経営組織をそこにみる事が出来る。(このような結びつきの鐵工業に於ける他の例として B. L. C. Johnson, *The Foley Partnerships*, Econ. Hist. Rev., Second Series, IV, 1952, pp. 322—340 参照) しかしこゝで問題となるのは、前の三つのグループとちがって、スペインサー家を始めるのは、前の三つのグループとちがって、スペインサー家を始めるのは、前の三つのグループとちがって、スペインサー家を始めるのは、前の三つのグループとちがって、

流れ込み、當時の非常に大きな錯綜した鐵工業者の結びつきのなかに混じりあっていたのである。

さてクエイカー達は、すべての場合に個々人の内の光によって導かれ、もはや世俗的身分のもとに評價されるのでなく、神の直接の命のもとに動く一人であると評價される。そして神のもとでは各々平等であり、お互いは愛しいながら一つに結ばれあっているという彼等の信念がクエイカー教徒を支配し、彼等の期間毎の會合に於いて、友愛と平等の氣持を通じて、親密な人間的關係が彼等の間につくりあげられ、それは産業的關係に於いても廣い結びつきとしてあらわれ、彼等の企業に安定と力を與えることになった。また彼等は約一世紀間殆んど closed community を形成し、結婚はその内部でなされ、かくして資本の消散が防がれ、彼等の勤勉、それによって得る富の正當性の意識、生活の嚴格さ、奢侈への敵意等は、得られた富を資本の再投資さらに新しい技術革新のための實驗に向ける事になり、産業革命期に於ける鐵工業の發展に著しく寄與することになったのである。

三

以上簡単にレーストリックの見解を紹介してみた。産業資本の形成に際して、その展開の主體的推進力として促進的に作用した近代資本主義の精神は、ビュリタニズムから重要な一契機を承継しつつ生誕し、そのビュリタニズムは産業的中産階

級に中心的地盤をもっているというウエバーの見解は、英國鐵工業についてその豊富な例を見出すことが出来ると思われる。しかしこゝで注意しなければならぬことは、彼はウエバーと同じ問題意識によって分析したのではなく、餘りにクエイカーと鐵工業の發展を平面的に結びつけているということである。即ち、産業革命期の鐵工業にたまたまクエイカーなるものが存在しており、その教義とその教派の強力な内的結合が丁度うまくその時期の鐵工業の發展に結びついたという理解の仕方である。私にはむしろその時期が鐵工業の展開を要請する社會的經濟的構造地盤をもっていたのであり、その同じ地盤がクエイカーなるものを誕生せしめたのであり、その兩者の結合は單に平面的機械的偶然的に行われたのではなく、構造的必然性をもっていたように考えられる。そのような社會的構造的地盤の分析と結びついた兩者の結合の理解こそが重要であるように考えられる。

これと同様の疑問は今迄のイギリス經濟史家による鐵工業の分析についてもあてはまる。彼と同様に鐵工業主の系譜やクエイカー教徒の果した役割を強調するアシュトンについては勿論であるが、系譜の面でもなく鐵工業は纖維工業とは全くちがふ craft system は domestic system を經過することなく、最初から capitalist basis で行われ、その發展段階には本質的變化はなく、單に chemical な技術的變化が行われただけであるというようなりブソン、アシュトン、マントウー其の他の支

配の見解についても甚だ大きな疑問がある。たしかに單なる技術的、經營的側面のみを問題とすれば一應はそのようにいへかもしれないが、鐵工業の發展をそのように産業革命に關するネフの見解と同様に、技術的經營的側近のみよりとらえて連續性を強調する事は妥當だろうか。始めは地主階級によって鐵工業の經營は行われていたと彼等は認めるが、後の産業革命期に於ける小生産者層との經營の交替をどのように説明するのだろうか。單に連續性とのみ認められぬ階級の交替はたゞ事實として記すだけで、そこに何の解釋も必要としないのだろうか。また封建社會でのアイアンマスターの存在形態と近代社會でのそれとは同じだろうか。それから經營形態についても、單に經營規模のみをみて本質的變化はないとするが、近代的合理性を貫ける様な經營的組織への變革が社會的經濟的構造地盤の變革と結びついて惹起されているのではあるまいか。技術的變化にして單なる連續的現象として理解されるが、やはり鐵工業の構造を前と後とちがったものとして意識させ得るような變化、即ち、鐵工業の構造全體を資本主義的なものに變革させるものがあつたと考えていゝのではないか。このような問題意識の差は、イギリス經濟史家の存在する社會的地盤と日本のそれとの差であるにはちがいないけれども、産業革命期に於ける英國鐵工業の分析の今後の問題點は以上のようなところにあると思われる。